■　人に成る　■

成人の日に

谷川俊太郎

人間とは常に人間になりつつある存在だ
かつて教えられたその言葉が
しこりのように胸の奥に残っている
成人とは人に成ること　もしそうなら
私たちはみな日々成人の日を生きている
完全な人間はどこにもいない
人間とは何かを知りつくしている者もいない
だからみな問いかけるのだ
人間とはいったい何かを
そしてみな答えているのだ　その問いに
毎日のささやかな行動で
人は人を傷つける　人は人を慰める
人は人を怖れ　人は人を求める
子どもとおとなの区別がどこにあるのか
子どもは生まれでたそのときから小さなおとな
おとなは一生大きな子ども
どんな美しい記念の晴着も
どんな華やかなお祝いの花束も
それだけではきみをおとなにはしてくれない
他人のうちに自分と同じ美しさをみとめ
自分のうちに他人と同じ醜さをみとめ
でき上がったどんな権威にもしばられず
流れ動く多数の意見にまどわされず
とらわれぬ子どもの魂で
いまあるものを組み　なおしつくりかえる
それこそがおとなの始まり
永遠に終らないおとなへの出発点
人間が人間になりつづけるための
苦しみと喜びの方法論だ

ある日突然、「今日からあなたは成人です」と言われても、連続的な日々において大きな変化が起きるわけでもなく、責任だけが重くなるような気がしている人が多いのではないか。報道によれば、「自分は大人だと思うか」という質問に「いいえ」と答える新成人が多いという。

その成人年齢が4月から18歳に引き下げられた。明治政府が「満二十年を以て丁年と相定め候」と太政官布告を出してから 146 年、制度の歴史的な転換である。大きな変化は親の同意なしに契約が可能になることであるが、権利には義務が伴うことを知っておこう。詐欺まがい商法の被害者になることは自分の責任で回避しなければならない。

では、成人するとはどういうことか。卒業式の式辞で紹介した谷川俊太郎の詩「成人の日に」は、「人に成る」ことはどういうことかを教えてくれる。

この詩は、出会って脳裡に深く残った。「大人になるためには、『他人のうちに自分と同じ美しさをみとめ／自分のうちに他人と同じ醜さをみとめ』なきゃいけないよ」と、優しくそして強く語りかけてきて、言葉は私の心をえぐり、奥底に鎮座した。

言葉に心をえぐられたのは、一人前の人間として認められたいと望んでいる一方で、そういう存在にはほど遠い自分があって、足りない部分を真っ直ぐに指摘されたからだ。以来、大切にしている。

今年度から、誕生日を迎えた高3生は順に成人となり、高校に成年と未成年が混在する。早く大人になりたい人がいて、まだ子どもでいたい人もいる。この機会に、成人することはどんな意味を持つのかを考えてみてほしい。永遠に終わらない「人に成る」ための営みを続けている成人の一人として、18歳でその仲間入りを迎える高校生を心から歓迎する。